風景と文学

野田宇太郎

文一総合出版

風景と文学

野田宇太郎

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23（1948）年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16（1941）年，第1回九州文学賞（詩）受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

風景と文学

昭和54年9月15日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎

発行者　佐藤　弘一

発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1979
0095-30017-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，カバー・帯に表示してあります。

目次

風景と文学

柳川の水路　八
大阪のみおつくし　一〇
祇園の秋　一三
明治村　一五
旅の伊豆　一八
三浦三崎　二〇
暮坂峠　二三
軽井沢　二六
武蔵野の落葉　二八

小説の風土

浅草の哀歓　三〇
銀座　三三
お茶の水　三五
向島　三八
日比谷公園　四一
深川のうた　四四
飯倉片町　四六
新佃海水館　四九

『若い人』と皇居前広場　五四
『雪国』と『帰郷』の風土　五七
『細雪』の背景　六〇
お夏清十郎　六四
秋成の墓　六七
『暗夜行路』と「城の崎にて」　七一
『こころ』と『雁』　七四
佐々城信子　七七
旅と『平家物語』　八一
藤村と紫式部　八五
須磨明石と『源氏物語』　八八
由良の琴の音　九一
印象と記録
『死の陰に』と共に　一五六
『夜明け前』と馬籠　九五
藤村と信州人気質　九九
武蔵野の水　一〇三
文学名所　一〇五
文学の中の西洋と東洋　一〇八
小説を観る　一一一
小説の背景と旅　一一四
樋口一葉二題
「にごりえ」附近　一一八
菊坂の一葉　一二八
田山花袋と『田舎教師』　一四〇
玉川上水の小鳥　一四六
漂泊の人　一七〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

水底の大和月ケ瀬　一七四
浅草のシーボルト事件碑　一七七
森鷗外と山田温泉　一八〇
馬籠と妻籠　一八四
雪の作品　一八八
遠野随筆
古街道の呼び石　一九一
鴉の種蒔き　一九四
北海の青春　一九六
十年目の函館と葛登志岬　二〇〇
吉野文学の細道　二〇五
さんるうむ随筆
相模のチロル　二〇七
麻布の坂　二〇九
千駄谷　二一〇
上池台附近　二一一
京橋附近　二一三
高輪辺り　二一四
青山　二一五
横浜の散歩道　二一六
富士桜高原　二一七
入間野と高麗郷　二一九
洗足池の花吹雪　二二〇
大井仙台坂　二二一
紀尾井町遠近
紀尾井町縁起　二二三
清水谷　二二五
幻の茜山　二二七
四谷見附附近　二二九
山王附近　二三三

三宅坂と渡邊崋山　二二四
隼町の思い出　二二七
赤坂離宮附近　二二九
番町絵図　二四一
お濠端　二四四
紀尾井町タワー鳥瞰　二四九

文学散歩の周辺

佐久の旅　二五四
茅ケ崎　二五八
金沢文庫　二六二
葛飾古道　二六六
多摩の横山　二七〇
湘南今昔　二七四
志賀高原　二七八
鎌倉過去帳　二八一
横浜のうた　二八五
熱海伊豆山　二九〇
按針塚　二九五
岩殿寺・鐙摺・葉山　二九九
北下浦　三〇三
小田原の文学　三〇六
詩碑の詩人たち　三一三

執筆覚え書

風景と文学

風景と文学

柳川市沖端（おきのはた）の表通りに面して、今も古びた母屋の一部をのこす北原白秋の生いたちの家がある。抒情小曲集『思ひ出』の序文「わが生ひたち」に書かれている家で、その前には「北原白秋生家」の石標も立っている。

白秋が明治十八年一月二十五日に生まれたのは母シゲの実家の熊本県玉名郡南関町外目にある石井家であった。その家もまた第二の故郷として「わが生ひ立ち」にもなつかしく書かれている。どちらも近代日本最大の詩人白秋の生涯とともに忘れがたい大切な家である。

沖端は柳川の旧城下町とは違って、有明湾岸の漁師町として栄えたところであることは『思ひ出』でも知られるが、沖端の旧家で「潮（うしお）」という筑後の銘酒を造った北原酒造所は、白秋の中学時代に大火があって酒蔵を焼いたあと、次第に家運も傾いて明治末年にはついに家を他に譲り、一家は長男白秋の住む東京へ移って行った。その家には後の作家檀一雄の実家も住んだと聞いているが、現在では白秋の北原酒造所とは似ても似つかぬ佃煮工場になっていて、内をのぞくと魚を煮つめるはげしい匂

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

いがむうんと鼻を突く。それでも、わたくしは故郷が同じ筑後ということもあって、三年に一度くらいは必ずその家の前に立つ。

その白秋生いたちの家が、現在の持主の事業失敗とかでいよいよ取りこわされるかもしれない、と聞いたときは、ひとごとならずわたくしはぎくりとした。

何しろ現代日本人は自然や歴史や文化を大事にすることを忘れがちになっているうえに、どこもかしこも都市化が激しいから、いつかはこんなことになるかも知れないという不安はあった。それについ四月のこと、わたくしは三浦三崎を一年ぶりに訪れて、やはり白秋にゆかりの深い二町谷（ふたまちや）という静かな漁師部落の見桃寺に行ったとき、そこも建物の老朽と時代の変遷に抗し切れず、近く全面的に改造されるらしいということを聞いて、東京近くの白秋遺跡としてもかけがえのないところだけに、いささか憂鬱になっていた。沖端の生いたちの家のことを聞くとまたかと思い、腹立たしくなるのをどうすることも出来なかった。

沖端も柳川市になって近ごろは水郷の観光都市として宣伝されているが、人間の純朴さは失いたくない。安っぽい宣伝に乗って金慾に目がくらむと人間は詩のわからない動物になる。詩がわからぬから、柳川の生命でもある水路の水もけがされてゆく。そのことをもっとも悲しむのは『思ひ出』の詩人白秋に違いない。

柳川の町から沖端は約三粁、歩いても大したことはないが、水の心を愛する人はその間を船で往来した。『思ひ出』にはその情景が見事にうたいあげられている。

白秋が晴れて故郷に錦をかざったのは昭和三年七月であった。そのときはさすがに詩情も大いに動

いて数多くの詩歌をのこしたが、その短歌の中に

しづかさは殿のお倉の昼鼠(ひるねずみ)ちよろりとのぼりまたも消(け)ぬかに

という一首がある。殿のお倉は旧柳川藩主立花家の土蔵のことで、今も沖端の町家をへだてた水路の上に海鼠(なまこ)壁を張出すようにして、美しい水影を映している。昼鼠とは白秋もその歌に「土俗に水陽の影をいふ」と注記しているように、水かげろうともいう、明るくたゆたう水の放つ反射の影のことで、それが昼の鼠のようにちょろちょろと土蔵の壁をはいのぼるのである。そんなにもほのかな故郷の水影さえ、白秋は見のがさなかった。柳川の水は白秋の詩の母でもあった。白秋の最後の著述は写真家、田中善徳との共著になる柳川の詩歌写真集『水の構造』であった。それは昭和十七年十一月二日の白秋逝去の後に遺著として出版された。沖端の白秋生いたちの家のすぐ近くまで『思ひ出』の水路は今もひたひたと白秋の心のように波立っている。その水路とともに白秋の家も、また永久に保存されてほしいと思う。(註・白秋生家はその後北原白秋生家保存会の手に移り、昭和四十四年十一月一日、明治時代の姿に復元されて白秋記念館となっている。)

(昭和四十三年五月)

大阪のみおつくし

大阪の文学は、浄瑠璃の近松門左衛門と浮世草子の井原西鶴なしには考えられない。二人とも作者を業としたのだから、大阪以外の世話人情も扱っているが、その文学の根底には、近世の金が物いう

大商業都市大阪の人間生活がひそんでいる。

現代の大阪市になって宇野浩二、武田麟太郎、織田作之助など、大阪育ちの作家たちに、とくに西鶴的リアリズムの伝統がねばっこくまといついているのも偶然ではあるまい。近松の情話心中物も、決して空想の所産ではなく、経済意識のつよい封建都市の義理人情が、必然的にかもし出した悲劇にほかならぬ。文学の背景にたえず経済社会がうごめいているのが、また大阪文学の特徴でもあろう。

大阪の繁栄に見逃がせないのは川である。わたくしの持っている寛政五年の大坂図は「河絵図」となっている。淀川を中心にして、堀川が縦横にひろがり、その水利によって繁栄したことが一目でわかる。文字どおりの水の都、日本のヴェネチアである。

今ごろこんなことをいうと、大阪の人は、だからわが大阪は明治二十七年から「みおつくし」を市章にさだめ、毎夕「みおつくし」の鐘の音も流しているのではないか、と笑うかもしれない。「みおつくし」は澪（水脈）の串の意である。逆三角形のしるしをつけた棒を各地の水郷の水の中に立て、深さや船の安全を船人にしらせたみちしるべであった。古代からその姿が詩情をそそったことは「万葉集」以来の歌でも知られる。古代の難波は淀川河口の遠浅の入江に点在した島々で、難波の八十島（やそしま）とも称された。そこには多くの「みおつくし」があったにちがいない。寛政年間出版の「摂津名所図会」にも、淀川下流安治川河口の一の洲に、回船問屋や船持仲間によって立てられ、水尾木（みおぎ）と呼ばれていたことが記されている。

文学は人間の心のうたでもある。うたは詩である。大阪に大阪の文学が生まれたのは、まずその自然に詩があったからで、大阪の詩を育んだのは淀川であり「みおつくし」はその象徴であった。

大阪の詩人といえば、まず薄田泣菫が思い出される。近代詩を革新した泣菫の詩集は、つぎつぎに大阪の金尾文淵堂から出版されて、日本象徴詩を樹立し、後半生は大阪毎日新聞の学藝部長としてすごした。また歌人では同じ新聞社に経済記者として勤め「日のうちは向ふへわたり夕橋をかへるにさむし堂島の風」とうたった中村憲吉がいる。どちらも淀川の川風にとおい「みおつくし」の幻をみた人たちであった。

わたくしは昭和四十二年に久しぶりに大阪を訪れたとき、何か気にかかるものがあって、用を足すより先に堂島や土佐堀や中ノ島をめぐった。東京の都市改造で、隅田川が無残な姿になっているのをみるにつけ、水の都の大阪のことが案じられていたからである。その不安はみごとに的中した。十数年前までは対岸の眺めがたのしめた淀川べりは、高速自動車道路の灰色の巨大な壁にすっかりさえぎられ、もうそこには水の都の美観などはなかった。歴史的な堀川もつぎつぎに姿を消し「みおつくし」の市章や鐘の音のふさわしい大阪はすでに滅びかけていた。

だが、まだ絶望はしなかった。わたくしはそこから淀川の流れをさかのぼり、新淀川から旧淀川がわかれる毛馬に向かった。毛馬は天明の俳人画家與謝蕪村の故郷とされ、その名作「春風馬堤曲」でも知られている。馬堤はもちろん毛馬の堤のことである。毛馬に着く少し手前には近松の「心中天網島」で知られた網島もあって、わたくしにとっては大阪のひそかな古典文学の細道である。毛馬に着いて広々とした新淀川に沿う堤防の路に立つと、ひとりでに「春風馬堤曲」中の「春風や堤長うして家遠し」の蕪村の一句が思い出された。……大阪は、やはり水の都である。

（昭和四十三年九月）

祇園の秋

七月の祇園会をさかいに京都は日ましにしずかになる。昼の茶屋通りをときおり急ぎ足にゆく舞妓の首筋のおしろいも京人形の膚のように乾き、花見小路角の一力の暖簾にも秋風がたわむれはじめる。加茂の水とともに祇園の北をひっそり走る白川の水もしだいに冷え、その川岸に寝そべるような吉井勇歌碑の鞍馬石にしみこんでいた熱気も、しだいにやわらいでゆく。

かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる

祇園は今も健在だが、明治の祇園はすでにはるかな思い出にすぎない。明治四十年（一九〇七）に発表された高濱虚子の小説「風流懺法」には一力のことが書かれている。これが近代小説にはじめてあらわれた祇園でもあったろう。しかしそれによって祇園が文学上にクローズアップされたのではなかった。祇園を文学的に有名にしたのはその後の吉井勇の歌、長田幹彦の小説である。

吉井勇が処女歌集『酒ほがひ』に収めた「祇園冊子」と題する京都の歌四十九首を発表したのは、明治四十三年だった。その年五月の京都の旅で祇園白川べりの大友という茶屋で作ったのが、今は大友の跡に造られている歌碑の「かにかくに……」の歌である。勇はそれより三年前の夏、與謝野寛、木下杢太郎と三人で九州旅行の帰途京都に立寄り、たちまち祇園情緒に魅せられたという。雑誌「明星」の新進詩人ながら、まだ早稲田の学生だった。それから三年後に発表した戯曲で十円ばかりの原

稿料を握った勇は、躊躇なく東京から京都行きの汽車に乗った、という次第である。それからまた五年後の大正四年（一九一五）には『祇園歌集』が出版され、大正六年にはその続編ともいうべき『祇園双紙』も出版されて、勇は祇園歌人となった。

新進作家の長田幹彦と谷崎潤一郎が京都にあらわれ、祇園や先斗町を根城に流連荒亡の生活をしたのは大正元年である。しかし創作の仕事まで忘れたのではなかった。幹彦はその間の体験から『祇園夜話』を書き、大正四年に出版されるとたちまちベストセラーになった。谷崎潤一郎は祇園小説こそ書かなかったが、「朱雀日記」をのこしている。

その後大正十一年になると近松秋江の「黒髪」「狂乱」「霜凍る宵」など一連の祇園を書いた自然派小説が発表された。秋江は祇園でお園という藝妓の家に身を寄せて、その情痴生活をあるがままに書いて文壇の注目をひいたのである。そのころ祇園を訪れた吉井勇に「秋江が閨の怨みを書くときは秋と言ふらむ京のあだし寝」という歌がある。

祇園の近代文学は以上のように先ず虚子の文にはじまり、勇の歌、幹彦の小説によって繚乱とした春を迎え、秋江によって秋を知ったと云ってよいが、その他にも若き日の與謝野晶子の「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」という明治三十四年の処女歌集『みだれ髪』の一首があるのを忘れてはなるまい。火のないところに煙は立たぬたとえのように、このような文学を生んだ祇園の火種（エネルギー）は一体何であったろうか。それはもちろん情痴ではあるまい。

それについて思い出すのは、若き日の勇や幹彦や潤一郎の友人で、三条小橋の旅館よろづやの若主人だった金子竹次郎さんが、晩年にわたくしに話した「祇園はね、ほかのくるわとちがった、あるボ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo